

## [総合的な学習の時間]

# 総合的な学習の時間における児童の達成感を高める指導の在り方

－地域素材「直江津駅」における社会参画を通して－

須田 亮子\*

### 1 主題設定の理由

今年度より施行された新学習指導要領では、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。」と示されている。また「自己の生き方を考える」ことの一つを「学習の成果から達成感や自信をもち、自分のよさや可能性に気づき、自分の人生や将来について考えていくこと」と表している。

2年間担任をした学級の児童は、「直江津が好きだ」と自分が住むまちを好意的に捉えている。まちを代表する直江津祇園祭の時期には、地域の一員として、四日間、祭りに参加する児童も多い。これまでの生活科や総合的な学習の時間においても地域とのかかわりは多く、その時の経験を楽しかった思い出として話してくれることもあった。また、課題を見出し、地域とかわりながら新たな活動を創り出すことを楽しむ集団でもあった。一方で「観光客が少ない。」「店が少ない。」といったマイナスなイメージをもつ児童もあり、「将来は直江津には住まないと思う。」と考える児童が半数以上という実態もあった。つまり、現状については好意的な捉えであっても、「自らのまち」という意識は高くなく、自分の生き方と直江津というまちを重ねて考えることには至っていないのである。

新学習指導要領の総合的な学習の時間では、「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う」ことが目標の一つとして掲げられている。地域や社会とかわりながら体験活動を行うことで得られる楽しさや満足感は、自分と社会とのかかわりについて考えようとする子どもを育むことができるだろう。自分の人生や将来について考える子どもを育むことが、社会変化の激しいこれからの時代を自分らしく生きていくために必要だと考える。

草下(2010)は、「子どもたちの達成感を誘発するためには、子どもが主体的に努力して達成できる目標の設定が必要となるのである。総合的な学習においては、子どもたちが主体的に協力して達成できる目標とその成果が重要となる。」と述べている。また林原(2020)は、「児童の達成感を高める総合学習を実施するために、教師は児童に対して適切な助言や学習支援を常に意識すること、また、他の教科や学校生活の中で児童の「協調性」や「統制性」を養うことで、総合学習の達成感をより高めることが期待できる。」と述べている。達成感とは、上記の手立てに加えて、自らの取組が社会に影響を与え、プラスに転化したときにこそ感じられるものだと考える。

そこで、本研究においては、身近な地域素材を取り上げ、社会参画する活動を通して、自分たちの活動が実際の地域社会にプラスの影響を与えていることが直に感じられる学習活動を仕組み、実社会とのつながりを通して活動の達成感がより高まっていく過程を実践的に明らかにしていく。

### 2 研究の目的

本研究では、総合的な学習の時間において、児童が主体的に地域素材とかわり、発信する活動を行うことで、自分と社会とのかかわりについて考え、地域における社会参画を通して、学習活動の達成感がより高まっていく筋道を明らかにすることを目的とする。

### 3 研究の方法

本研究では、以下の3つの方法で、研究の目的を明らかにすることを目指した。教育活動から得た児童の発言や作文

---

\*上越市立直江津小学校

シートにおける記述，行動の変容などを分析し，考察する。

### (1) 地域素材に着眼した活動の設定

直江津駅は，新潟県鉄道発祥の地と呼ばれ，開業130年以上が経っている。駅舎内には，鉄道運賃の計算や鉄道施設の位置を示す際の基準点となる「ゼロキロポスト」や「ターンテーブル」等，歴史的構造物が数多く残されている。しかし，自動車社会である現状では，鉄道の利用経験がない児童が多い。そのため，児童は初め「昔は，直江津駅も有名だった。」「家族の中でも使っている人はいない。」と考えていた。直江津駅を中心に活動することで，身近にある鉄道や直江津駅が交通手段としての働きはもちろん，自分たちが住むまちの財産として，直江津駅が昔から愛されてきたことを知ることができると考えた。1年間，直江津駅や鉄道を中心とした直江津のまちについて考えることで，体験活動の学びや自らの考えや願いを発信したいという思いを高められると考えた。

### (2) 専門的な方々との出会いの重視

さまざまな職業や立場の大人と出会うことは，児童が自分の将来について考えることのきっかけとなる。また，専門的な立場の方との出会いは，児童の体験活動をより豊かなものにする。そこで，直江津駅の駅長や職員と交流する機会を多く設定することにした。直江津駅の歴史や魅力を知ることができるだけでなく，地域で働く大人とのかかわることでその方の地域への思いを知り，自分と地域とのかかわりについて思いをもつことができると考えた。駅職員だけでなく商工会議所職員やいすみ鉄道前社長（現えちごトキめき鉄道社長）との出会いや交流を通して，地域の良さを活用した発信の仕方を学ぶことができるようにした。

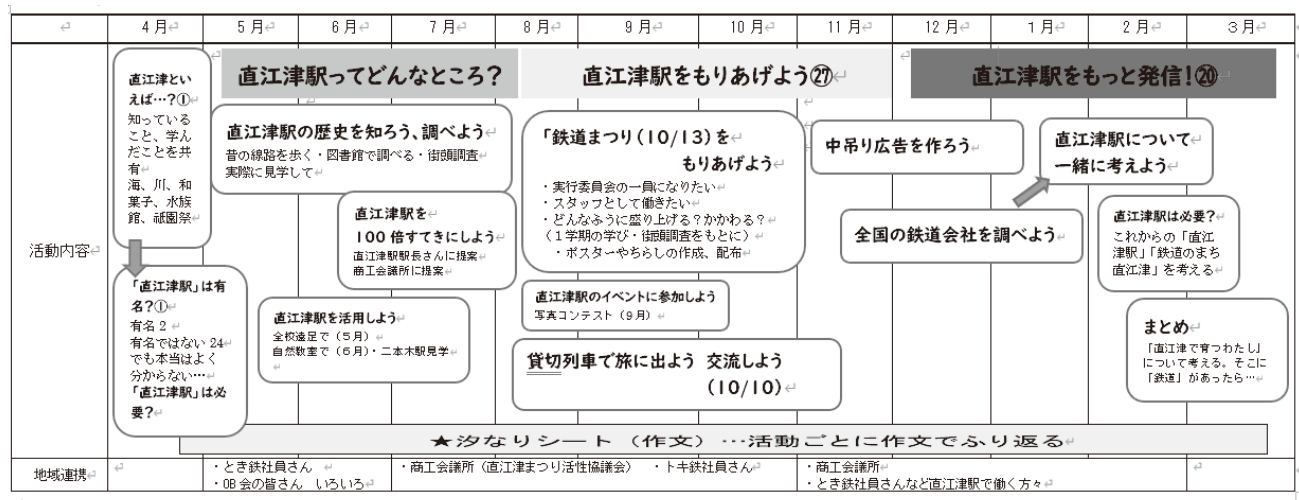
### (3) 相手意識をもとにした発信活動を軸とした社会参画

児童は，地域の良さを知ると，それらを保護者や地域の方々に伝えたいという思いをもつだろう。自らの考えをまとめたり，仲間と協力して表現したりする活動は，学習における達成感の高まりにつながると考えられる。そこで，体験活動の学びや自らの思いを様々な方法で発信する活動を設定する。保護者や地域だけでなく，より多くの方に知ってもらえる発信方法にし，社会参画を促すことを目指した。

## 4 実践の概要と考察

本研究は，平成30年度の5年生26名に対して，総合的な学習の時間に実践した「『鉄道のまち 直江津』から発信」の概要と考察である。

### (1) 活動の構想



上述した「地域素材に着眼した活動の設定」として，直江津駅を活動場所の主として，1年間の活動を構想した。また「専門的な方々との出会いの重視」として，直江津駅駅長，職員との出会いや活動，いすみ鉄道前社長との交流を設定し，「相手意識をもとにした発信活動を軸とした社会参画」として，中吊り広告の作成を設定した。

## (2) 活動の実際と考察

### ① 地域素材に着眼した活動の設定

1年間の活動の初めに、「直江津駅」について考える時間を設けた。児童に2つの質問をしたところ、表1のような結果となった。「直江津駅には何もない。」「あまり使われていない。」「よく知らない。」という理由とともに、「有名ではない。」と答える児童が多くいた。

しかし、「私は困らないけれど、高校生が登下校に使ったり、会社への通勤に使ったりしているからないと困る。」「私は使わないけれど、車、バス、タクシーよりは安いと思うからなくなると困る。」「いまは、歩きや車の人がほとんどだからなくなっても仕方ない。」という思いがあり、この時点で、児童は、直江津駅を交通手段の1つとして捉えていた。同様に、家族や地域の方にアンケート調査をすると、直江津駅をほとんど利用していないことが分かった。そこで、直江津駅がどのような施設なのか、地域にとってどのような存在のものであるのかを調べることにした。直江津駅の歴史や施設を見学したり、直江津駅職員と一緒にリゾート列車「雪月花」の見送り体験をしたりすることで、児童は、直江津駅で活動することを楽しむようになり、愛着を深めていくようになった。

表1 活動初めの児童の考え

① 直江津駅は、有名だと思いますか。			
有名	2人	有名ではない	24人
② 直江津駅は、必要ですか。			
なくなると困る	23人	なくなっても仕方がない	3人

### ② 専門的な方々との出会いの重視

直江津駅での活動では、いちごトキめき鉄道直江津駅駅長をはじめ、直江津駅の職員とかかわる場を多く設けた。直江津駅駅長は、校区内に住む地域の方でもあり、児童にとっては身近な存在になった。

#### 【児童の作文シートより】

- ・直江津駅を見学して、ここがすごいなあと思ったことがあります。それは、お客さんに対してのおもてなしです。駅長さんは電車が見えなくなるまで手を振っていました。
- ・リゾート列車雪月花の見送りでは、「また来てほしい。直江津を好きになってほしい。」という思いをもって、駅員全員でおもてなしをしていました。
- ・二本木駅を見学して、学んだことがあります。それは、地域の人のあたたかさです。もともと倉庫だった場所をリフォームして、みんなが使えるように提案したり、手作りの雑貨や絵があったりと、駅や地域を大切にしているというのが伝わってきました。これを直江津駅でもできるといいなと思いました。

直江津駅で働く方々との出会いは、児童に「駅の歴史や工夫を知ってもらいたい。」という思いをもたせた。さらに、利用者や地域のことを考えて仕事に向かっている姿を見て、「自分たちでも何かしてみたい。そして、直江津駅をもっと有名にしたい。」という思いをもつようになった。この思いは、駅職員とかかわることで得られた思いである。繰り返し直江津駅を訪れ、その都度、駅長や駅職員と交流することで、直江津駅がさらに身近なものになっていったと考えられる。

さらに、全国の第3セクター鉄道から鉄道会社の工夫を調べる活動を通して、新聞記事の中から地域とともに鉄道会社を盛り上げる取組をしていた千葉県にあるいすみ鉄道前社長の存在を知った。いすみ鉄道の取組や前社長の考えに興味をもった児童は、2019年2月に、前社長と交流する機会を得ることができた。「駅を残し、地域を盛り上げるために必要なことは、地域に住む自分たちが活動を楽しんだり、自分たちが掃除をしたりすること。」と学んだ児童は、自分たちの住むまちをさらに考えるようになった。

#### 【児童の作文シートより】

- ・今あるものを大切にしながら、地域の活性化を考えることはすてきだなと思いました。
- ・駅と地域と一緒に活動することが大事だなと思いました。地域をまきこんだ何かをしたいです。

活動を通して出会った方々との交流は、児童の地域素材への愛着をさらに深めるものとなった。そして、場所は違うが児童と同じ思いをもって活動をしている方々との出会いは、これまでの活動を肯定してくれるものであり、さらに自分と地域とのかかわりを考えるようになるきっかけを与えてくれるものとなった。



### ③ 相手意識をもとにした発信活動を軸とした社会参画

「自分たちで直江津駅を盛り上げたい」という思いをもった児童は、「盛り上げるためには、直江津駅を知ってもらうことが必要だ。」「もっとたくさんの人に直江津駅に来てもらいたい。」と考え、地域の方に直江津駅を発信する活動を計画し、以下の3点を実施した。

- ・貸切列車「かがやき999」の運行（写真1）
- ・「直江津鉄道まつり」への参加（写真2）
- ・中吊り広告の作成（写真3）



写真1 貸切列車「かがやき999」運行の様子



写真2 「直江津鉄道まつり」への参加の様子



#### 【児童の作文シートより】

- ・いつもは静かな車内だけど、今日にはぎやかで楽しかった。みんなで過ごす時間があつという間だった。
- ・今日は、おうちの人を招待したので、私たちが楽しませる側だった。でも気付いたら、自分も楽しんでいた。みんなが笑顔で、駅長さんが教えてくれた「おもてなしの心」を実践できた。
- ・「かがやき999」は、分刻みのスケジュールだった。駅の職員さんたちが気を付けているように、時間を守って進めるって大事だなと思った。
- ・駅長さん、直江津駅の職員さんだけでなく、商工会議所の方や他のお店の方など、たくさんの人がかかわって、まつりを盛り上げていました。ほくも「おもてなしの心」を実践することができました。
- ・最初は人が少なかったけれど、呼び込みをすると、たくさんの方が来てくれました。みんなが楽しそうでよかったです。
- ・鉄道まつりでは、やりたかったことが実現できました。たくさんのお客さんとかかわることができました。

児童の振り返りからは、自分たちが提案した活動を実践したことを通して、達成感をもったことがうかがえる。しかし、これらの活動だけでは、自分たちの一方的な発信に満足することにとどまり、かかわった相手はどう思っているのかは分かりにくく、児童もこのことについて考えてはいない。



写真3 中吊り広告の作成、掲示された車内や自由通路の様子

直江津鉄道まつりに参加した後、直江津駅駅長から「車内を飾る中吊り広告を作って、駅やまちをPRしてほしい。」と頼まれた。「直江津駅の歴史的価値やまちの良さを直江津に住む人以外にも伝えたい。」と考えていた児童は、この活動に意欲的に取り組んだ。完成した中吊り広告は、駅長に直接渡し、地域へもちらしを作成することで、発信を行った。児童が作成した中吊り広告は、2019年1月～3月に、えちごトキめき鉄道はねうまラインの3車両に掲示された。また、あすか通り（直江津駅の自由通路）の掲示板でもPRしてもらうことができた。

【児童の作文シートより】

- ・ 駅長さんが「地域の人に配るお知らせの紙も、掲示板にはる。」と言ってきて、うれしかったです。こういうのが全国へのPRにつながると言っていました。そうなったらいいなと思いました。
- ・ 「すばらしい」と言っていただきうれしかったです。そしてよろこんでいただけてよかったと思いました。たくさんの人に直江津に来てほしいです。

この時の児童の振り返りからも、自分たちの作品が完成し、駅長の言葉を聞き、活動に満足したことが分かる。しかし、楽しませたい対象者が目の前にいる直江津鉄道まつりとは違い、電車に乗る機会の少ない児童たちにとっては、中吊り広告が本当に掲示されているのか、見た方がどんな反応をしたのか実感しにくかった。車両に掲示される様子が紹介された新聞記事を見ながら、「ちゃんと飾られたのは分かったけれど、自分たちで見ていないから、やった感が無い。」とつぶやく児童もいた。児童が主体的に地域素材とかかわり、学びを発信することで、自分と地域や社会とのかかわりを考えることができるとし、実践してきたが、発信するだけではなく、発信したものに対する他者からの反応が、児童の学習における達成感に影響するのではないかと考えた。そこで、実際に通勤や登下校にはねうまラインを利用している方の感想や中吊り広告を見たくて電車に乗っているがなかなか会えることができない方がいることを、新聞記事を通して紹介することで、取組の効果を実感できるようにした。

【中吊り広告を見た方からの感想】

- ・ 地元を応援しようとする気持ちが伝わってくるし、小学生の絵を見るとなんだかホッとする気持ちになりました。
- ・ いつもは下を向いてスマホを見ているけれど、中吊り広告に自然と目がいききました。

【上越タイムスの記事より】

- ・ 先日の本紙に「トキ鉄車両に中吊りポスター 直江津小5年生描く」という記事があった。(中略) そのポスターをぜひ見てみたい、と早速、妙高はねうまラインに乗りに行った。タイミングが悪いのだろうか、乗るたびに車両内を注意して見回すのだが、中吊りポスターがない。(中略) 直江津小5年生のポスターを見たい気持ちは日ごとに強くなっていく。

【児童の作文シートより】

- ・ 今までの学習のことを発信できているか分からないけれど、見ている人の心にとどいていてびっくりした。知ってもらっただけでなく、「元気がわいた。」「ほっとした。」など、気持ちの面でも心にとどいていてびっくりした。小さなことでも、もっとたくさんの人を明るく元気にできるような活動をしていきたいと思った。
- ・ 私たちのことを知らない人が関心をもってくれることがうれしかったです。新聞の発信力ってすごいなと改めて思いました。
- ・ 上越タイムスの記事を読んで、中吊り広告が完成したと思いました。絵は前にできあがったけれど、お客さんに気持ちが届いて、初めて完成したと言えるのではないかなと思いました。この記事を読んで、うれしかったです。私がなにかすれば、どんな小さなことでも、どんなくだらないことでも、必ずだれかが見てくれると思えました。むだじゃないって思うと、とてもうれしかったです。

児童の作文シートから、これまでの学びをまとめたり、保護者や地域に発信するだけでなく、発信されたものを見たり、聞いたりした他者からの反応があることで、より自分と社会とのかかわりについて考えることができると感じた。

上述した3つの方法によって活動してきた児童に、活動の初めに行った質問を再度行った。児童の答えは、表2にあるように、全員が「なくなるとは困る。」というものだった。活動を行う前は「交通手段として存在する直江津駅」と考えていたが、「通勤、通学に困るし、子どもにとっても、一つの大事な交通手段だから。」「利用者は少ないかもしれないけれど、鉄道ファンはたくさんいる。」という考えのほかに「駅員さんや駅長さんのやさしさに触れた。直江津は鉄道のまち。直江津にとってかかせないものだ」と知ることができたから。」「直江津駅がなくなると、直江津が静かなまちになってしまう。いいまちだけれど、何か物足りないまちになって

表2 活動後の児童の考え

直江津駅は、必要ですか。		
なくなると困る	25人	なくなっても仕方がない 0人

しまう。」という考えが芽がった。1年間の活動を通して、それぞれが感じたことを、地域や駅職員の思いに触れながら理由を話す児童が増えた。活動のまとめとして、「わたしにとって直江津駅とは」をキャッチコピーで表し、それぞれの学びや思いを共有した。

【児童の作文シートより】

- ・私が一年間で学んだことは、「おもてなしの心」「おもいやり」「やさしさ」です。活動を進めていくうちに、一番心に残った「やさしさ」をもとに、キャッチコピーを考えました。鉄道まつりでお客さんやお店の人のやさしさのパワーを感じました。このやさしさをたくさん広めたいです。
- ・直江津駅の歴史についても心に残っているけれど、一番は「おもてなしの心」です。今年の活動が実現したのは、たくさんのおもてなしがあったからです。私も駅長さんのように思いやりをもって、人を笑顔にしたいです。
- ・直江津駅はいろいろな方に愛されています。その中でも一番は地域の人たちからの地元愛です。

## 5 成果

### (1) 主体的に地域素材にかかわることが活動意欲を高める

児童は、地域素材である「直江津駅」を活動の場と設定し、繰り返し訪れることで、「自分たちの手で、直江津駅を盛り上げたい。」と考えるようになった。これは、自分たちでも直江津駅のために何かできるのではないかと、主体的に社会とのかかわりについて考えた姿である。また、直江津駅駅長や駅職員、いすみ鉄道前社長との出会いは、地域にかかわる大人たちも、まちを活性化させるために様々な工夫を考えているということを知ることができた。身近な社会である地域の中に知り合いが増えると、地域活動にも参加しやすくなるだろう。それだけでなく、自分たちの地域について、大人とともに考える機会も生まれる。いすみ鉄道前社長がえちごトキめき鉄道の社長に就任されたときは、「自分たちがきっかけを作ったかもしれない。」と喜び、自分と社会がかかわりをもっていることを実感することができた。

### (2) 双方向性による学習活動の展開が児童の達成感を高める

これまでに述べた様々な活動の中で、相手意識をもって発信する活動を行った。児童が行った発信には、保護者や地域から直接伝わる感想や新聞を通して分かる感想などの他者からの反応があった。発信に対する他者からの反応は、児童の発信する活動への意欲をさらに高めるものであった。自分たちの発信を不特定多数の人が見ていることを知り、自分たちのまちを盛り上げていくために、もっと広範囲に発信することもできるのではないかと考え始める児童もいた。これは、発信する活動が一方的な物ではなく、学習が進む中で、児童と社会との間に双方向性のつながりが生まれ、学習活動に対する達成感が高まっていった姿である。

## 6 今後の課題

未来を生きる児童が、自分と社会のかかわりについて考え、参画し続けるためには、小中連携の視点や継続したカリキュラムマネジメントが必要だと考える。今後も地域とかかわりながら活動する総合的な学習の時間を実践し、自分と地域や社会とのかかわりについて、主体的に考えていくことができる単元開発を行っていきたい。

## 引用・参考文献

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』（東洋館出版）2017年
- ・草下實『児童の達成感を導く総合学習教材開発－地域の民話を題材とする影絵と音楽を通して－』（鳴門教育大学研究紀要）2010年、25巻、pp.303～317
- ・林原慎『小学校「総合的な学習の時間」の達成感に影響を及ぼす要因』（日本教育工学会論文誌）2020年、44巻1号、pp.127～134